宇宙航空研究開発機構特別資料 M-V型ロケット(5号機から8号機まで) 2008年2月

M-Vロケットの飛翔軌道/風補正/電波誘導

山川宏^{*1#},前田行雄^{*1},石井信明^{*1},小川博之^{*1},野中聡^{*1},山本高行^{*1} 津田雄一^{*1},川口淳一郎^{*1},周東三和子^{*1},感応寺治城^{*2} 追田幸恵^{*3},古林剛士^{*3},北田恒行^{*3},渋谷彰^{*3} 大塚浩仁^{*4},内田洋^{*4},江西達也^{*5},後藤晋一^{*5},齋藤一晶^{*5}, 佐藤裕彦^{*6},櫻井博昭^{*6},有沢雄三^{*7}

1. はじめに

M-Vロケット(5, 6, 8, 7号機)における軌道計画,風補正および電波誘導システムの研究開発および成果に ついて概説する(1, 3, 4号機については文献1~8を参照, 5号機については文献9も参照).風補正とは,打 上げ時の風速・風向を予測して,最終投入軌道を変更することなく機体にかかる荷重を軽減するようにロケット の第1段姿勢ターゲット(ランチャ角度を含む)を最適化することを指す.また電波誘導とは,新精測レーダの 観測量である直距離,方位角,上下角から,M-Vロケットの軌道推定(位置,速度)を行ない,飛翔中に生ずる 軌道分散を補正して最終達成軌道の目標軌道からの誤差を極力小さくするための誘導コマンド(ロケットの姿勢 ターゲット変更)を送信することを指す.

M-V-1~8号機の飛翔軌道をまとめたものを、図1.1 (高度-ダウンレンジ図)及び図1.2 (緯経度図)に示す.

2. 研究開発の概要

2.1. M-Vロケットの軌道計画

2.1.1. M-V-5 号機の軌道計画

M-V-5号機は、4段式ロケットであり、第1段~第4段がほぼ連続燃焼することで、MUSES-C探査機(はやぶ さ、約510 kg)を地球重力圏から脱出する軌道に投入する。軌道設計時には、第1段~第4段の全段の姿勢履歴 の最適化を行なう、高層風としては、内之浦宇宙空間観測所(以下,USCと言う)上空の5月の平均風を想定する。 第1段は、打上げ時期の標準風に基づいたゼロリフト軌道を飛翔する、第1段分離(X+75秒時)時に迎角が生 じないようにし(要求条件:0度)、第1段分離時の動圧は約340kgf/m²(要求条件:440kgf/m²以下)である。

第3段燃焼中と第4段燃焼中の姿勢は一定である。小惑星までの惑星間軌道から決まる第4段燃焼終了時のエネルギーC3(地球から無限遠にある点における相対速度の2乗)=+11km²/s²,脱出方向の赤緯(春分点基準,

^{*1} The Institute of Space and Astronautical Science (ISAS) /JAXA

^{*2} Office of Space Flight and Operation / JAXA Uchinoura Space Center (USC)

^{* 3} NEC Aerospace Systems, Ltd.

^{* 4} IHI Aerospace Systtems Co., Ltd.

^{* 5} Mitsubishi Precision, Co., Ltd.

^{*6} VAISALA

^{*7} Japan Weather Association

[#] Kyoto University from Sep. 2006.









赤道面基準系) = - 29deg,脱出方向の赤経(春分点基準,赤道面基準系) = 221degである.

打上げ(X)時刻および赤経は,探査機の惑星間軌道計画により決定される.探査機の軌道設計ではC3と赤緯 は打上げウィンドウ中(2003年05月9日~25日)で固定されることを基本方針とする.C3と赤緯が固定されな い場合は,各打上げ日で第1段から第4段までのノミナル軌道を固定し,第4段誘導則における目標C3,赤緯, 赤経(打上げ時刻)を打上げ日ごとに変更することで対応する.第1段から第3段までのノミナル軌道は固定し, 打上げ日ごとに,第4段のピッチ,ヨー角によりC3と赤緯を調整し打上げ時刻により赤経を調整する方法もあ るが,この場合,ノミナル軌道と第4段誘導則の双方を毎日更新する必要があるため採用しない.MUSES-C探 査機の搭載推進系が対応可能なインジェクション誤差(第4段燃焼終了後の軌道分散)は,C3±1km²/s²,赤経±1.7 度,赤緯±0.35度(第4段Isp誤差3秒,第4段姿勢誤差1度相当)である.

図2.1.1-1にシーケンスを、図2.1.1-2にダウンレンジ-高度図を、図2.1.1-3 にノミナルの姿勢ターゲット時間履 歴 (ピッチ/ヨー/ロール)を、表2.1.1-1にタイムシーケンス、表2.1.1-2に目標投入軌道を、表2.1.1-3にロケット 軌道条件を列記する.



図2.1.1-1 M-V-5号機フライトシーケンス

480







図2.1.1-3 M-V-5号機ノミナル姿勢ターゲット時間履歴(ピッチ/ヨー/ロール)

表2.1.1-1 M-V-5号機タイムシーケンス

○: M2・EPT タイムシーケンス(点火管制装置より X-50 秒に起動,機上で変更可能)

●: M3-EPT タイムシーケンス(M2-EPT より X+197 秒に起動, 取り外しの上変更可能)

◎: EPT·SA タイムシーケンス(M3·EPT より X+367 秒に起動)

タノ	イマ イベント	X相対	
	タイマ点火管制装置起動	-60秒	(標準時刻設備により起動)
\bigcirc	B1-CONT スタート/NAV スタート	-48秒	
\bigcirc	M2-EPT ANS OK	-31秒	
	1段演算開始	-30秒	
\bigcirc	1段MNTVC用SPGG点火	15 秒	
\bigcirc	1段モータ点火	0秒	
\bigcirc	1段SMRC 点火	3秒	
	1段MNTVC制御開始	3秒	
\bigcirc	計測 B1-V OFF	71秒	
\bigcirc	B1 テレメータアンテナ切替	73 秒	
\bigcirc	B2-CONT スタート	74 秒	
\bigcirc	B3 計測メモリリセット	74 秒	
\bigcirc	B1 計測(温度)メモリリセット	74 秒	
\bigcirc	B2 計測(歪)メモリリセット	74 秒	
	1 段制御終了(MNTVC, SMRC)	74.5 秒	(1段 MNTVC 舵角保持)
\bigcirc	1/2 段分離	75 秒	
\bigcirc	2段モータ点火	75 秒	
\bigcirc	2段SMRC 点火	75.5 秒	
	2段MNTVC,2段SMRC制御開始	75.7 秒	
\bigcirc	TV カメラ窓リセット	110秒	
\bigcirc	2段SMSJ 点火	139秒	
\bigcirc	3段SJパイロバルブ開	139秒	
	2段SMRC制御終了,SMSJ制御開始	139.5 秒	
	2 段燃焼終了	151 秒	
	2段 MNTVC 制御終了	152 秒	
	2段レファレンスチェンジ開始	152.5 秒	
\bigcirc	TV カメラ切替	180秒	
\bigcirc	NF 開頭準備	181秒	
\bigcirc	計測 NF-V OFF	182秒	
\bigcirc	NF 開頭	186秒	(2 段レファレンスチェンジ開始後 33.5 秒)
	SMSJ3 軸ファインモード移行	190秒	
\bigcirc	B3-CONT スタート	195秒	
\bigcirc	計測 B3-V OFF	196秒	
\bigcirc	M3·EPT 起動	197 秒	
	SL-ANS	197 秒	(Y1+0秒)
	2段SMSJ制御終了	199.5 秒	

482

\bigcirc	2/3 段分離	200 秒		
	3段 SJ3 軸制御開始	201秒		
	3段ノズル伸展	202 秒	(Y1+5秒)	
	3 段 MNTVC ACT ロック解除	203 秒		
	3段ノズル伸展機構投棄	204秒	(Y1+7秒)	
	3 段 SJ 一時休止	204.5 秒		
	3段モータ点火	205 秒	(Y1+8秒)	
	SJロールハイスラスト移行	205.5 秒		
	3段 MNTVC 制御開始	205.5 秒		
	SJ 昇温コマンド開始	210秒		
0	M2·EPT 停止	215秒		
	SJ 昇温コマンド終了	218秒		
	ロール90度マヌーバ開始	237 秒	(精測レーダ月	刊)
	CLK-ENABLE	243 秒	(Y1+46秒)	
	3段 SJ 制御切替(ロースラスト)	295 秒		
	3段 $SJ3$ 軸制御開始	306秒		
	3段燃焼終了	309秒		
	3段 MNTVC 制御終了	315 秒		
	3段レファレンスチェンジ開始	317 秒		
	3段レファレンスチェンジ終了	336 秒付近	(レファレン	スチェンジ 6.5 度相当)
	B4-CONT スタート	356 秒	(可変項目,)	(2+0秒)
	スピンモータ点火	359 秒	(Y2+3秒)	3/4 段分離まで 11.0 秒が条件
	3段 $SJ3$ 軸制御終了	359.1 秒	(Y2+3.1 秒)	
	EPT-SA スタート	367 秒	(Y2+11秒=	Z)
\bigcirc	EPT-SA スタート	367 秒	(Z+0秒)	3/4 段分離前が条件
\bigcirc	AOCU タイミング	369秒	(Z+2秒)	
	3/4 段分離	370 秒	(Y2+14 秒)	
\bigcirc	4段ノズル伸展	372 秒	(Z+5秒)	
\bigcirc	4段伸展機構投棄	373秒	(Z+6秒)	
\bigcirc	4段モータ点火	374秒	(Z+7秒)	(参考:4段ANCなし)
	3段MNTVCACT ロックコマンド	375 秒	(Y2+19秒)	
	M3·EPT 停止	376 秒	(Y2+20秒)	
	M34 サーボアンプ電源 OFF	401秒	(Y2+45 秒)	
	4段燃焼終了	468秒		
\bigcirc	4段·INS OFF	605 秒	(Z+238秒)	
\bigcirc	4段/SA 分離	610秒	(Z+243 秒)	(4段IG+236秒)
	ヨータンブラー	612 秒	(Z+245秒,	SASEP+2sec 延時)
	タンブルモータ	619秒	(Z+252秒,	SASEP+9sec 延時)
\bigcirc	EPT-SA OFF	629 秒	(Z+262 秒)	

表2.1.1-2 M-V-5号機目標投入軌道

epoch	(sec)	; Launch+383.4161
distance	(km)	; 6582.084
geocentric latitude	(deg)	; 30.31652
longitude	(deg)	; 142.7790
velocity	$(\rm km/s)$; 11.49386
flight path	(deg)	; 0.477e-14
azimuth	(deg)	; 97.23434

表2.1.1-3 M-V-5号機ロケット軌道条件

打上げ時刻	2003 05 09 04:29:25 UTC
	2003.05.09.13 [:] 29 [:] 25 JST
衛星重量 509.74kg	$509.73(\mathrm{kg})$
第4段燃焼終了時 C3=+10.99209 km^2/s^2	$10.99202(km^2/s^2)$
第4段燃焼終了時赤緯(春分点基準,True-Of-Date-Earth Equatorial 系)	$-29.02072 (\mathrm{deg})$
第4段燃焼終了時赤経(春分点基準,True-Of-Date-Earth Equatorial 系)	$221.1435(\mathrm{deg})$
第1段燃焼中の(Q*CNA*attack.)最大値	$174.5182(kgf/m^2)$
第2段点火時動圧 $<440 kgf/m^2$	$439.9610(kgf\!/m^2\!)$
第2段燃焼中動圧×迎角<440kgf/m²×4deg=31kgf/m²	$30.80017(kgf/m^2)$
第1回誘導コマンド有効時(X+105sec)動圧×05deg<440kgf/m ² ×4deg	$16.85872(kgf/m^2)$
第2回誘導コマンド送信時(X+113sec)動圧×10deg<440kgf/m ² ×4deg	$13.75500(kgf/m^2)$
第2段燃焼終了時 遠地点高度>150 km	221.6349 (km)
第3段燃焼終了時 落下点ダウンレンジ<5000km	4999.982 (km)
第3段ピッチ角と第4段ピッチ角の差3.5度以下	$1.710127(\mathrm{deg})$
第4段燃焼終了時飛行経路角>1deg	$4.566172(\mathrm{deg})$
第4段燃焼中の最大 heat flux <0.3kW/m ²	$0.1464807(kW/m^2)$

2.1.2. M-V-6号機の軌道計画

M-V-6号機は全段に姿勢制御機能を備えた3段式固体ロケット(全備重量約140トン)であり,ASTRO-E I 衛 星(X線天文衛星,約1700kg)を,近地点高度約260km(要求条件:200km以上),遠地点高度約575km(要求条件: 550km以上,600km以下),軌道傾斜角約32度(要求条件:32度±1度)に投入する.第1段は,打上げ時期の 標準風に基づいたゼロリフト軌道を飛翔する.第1段分離(X+75秒時)時に迎角が生じないようにし(要求条 件:0度),第1段分離時の動圧は約340kgf/m²(要求条件:440kgf/m²以下)である.第2段燃焼終了後の頂点高 度は約315kmに達する.最終段である第3段は,一定姿勢で燃焼する.第3段燃焼終了は打上げ後311秒であり, 燃焼終了後に近地点が来ないように,このときの飛行経路角は0.5度(要求条件:0.5度以上)である.また,第1 段落下点,第2段落下点は設定された範囲内にある.打上げ後1360秒付近のクリスマス島局上空通過時は上下角 90度付近をできるだけ回避することが,サブペイロードのデータ取得の観点から望ましい.なお,誘導コマン ドにより,第2段及び第3段の姿勢ターゲットが修正されることはあるが,第3段点火時刻等タイムシーケンス が飛行中に修正されることはない.

X + 1307秒における衛星分離後,ASTRO-E II 衛星は搭載推進系によって遠地点付近で近地点高度上昇用の△ Vを行い,高度550km ~ 600kmの略円軌道に投入される.この円軌道の高度範囲は,観測におけるバックグラ ンドノイズの観点から決められている。衛星分離姿勢は、その機軸方向(衛星の+Z軸)が約45分後の遠地点に おける速度方向と一致するように決定される。打上げ時刻は、衛星分離姿勢における衛星の+Z軸からの太陽角 が100度付近であるという制限から12:30 JST付近に設定される。これは、衛星分離後にΔV実行判定をする時 には日照である必要があること、衛星+Z軸からの太陽光を避けることという条件に起因する。

M-V-4号機ではロケットSバンドテレメータアンテナの切替は第3段タイマによっていたが,6号機では搭載制 御演算装置(CNE)からの信号を利用するためタイマ項目にはなっていない.第3段搭載のトランスポンダには 受信レベルに基づく自動切替機能があるが,同じトランスポンダで確実に追尾するためにロールは第3段燃焼中 に+90度制御(後ろから見て時計回り)する.

第3段燃焼終了後,USCの可視中(X+約450秒まで)に第3段SJ(Side Jet)によって,約150度の姿勢反転(X+347秒開始,X+422秒終了)を行う.これは衛星の分離姿勢へ制御することが目的であり,途中でロケットス ピン軸が地球を指向する方向の反転を行う(衛星班).USC可視期間中に姿勢反転結果をほぼ確認できるが,小 笠原局からのリアルタイムロケット姿勢データ(ピッチ/ヨー/ロール)によっても確認可能である.

アンテナ切替器はCNEからのアンテナ切替信号を受けて指示されたアンテナへの切替を行う(ピッチ/ヨー は計画値,ロールはリアルタイム). CNEにはノミナル軌道情報から算出した「アンテナ選択基準テーブル」が 記憶されている. CNEはテーブルの基準値とロケットのロール角情報を用いて,地上局に対して適当となるア ンテナへの切替信号を生成する.レーダは、トラポンの自動切替機能を利用する.クリスマス島局の可視時には アンテナはクリスマス島局側に向くように設定する.

5rpmのロースピン後 (スピンアップ開始X + 1291秒, 終了1306秒), X + 1307秒に衛星分離をするようシー ケンスが組まれる. 第3段残留推力による衛星との衝突回避のために第3段は衛星分離後にタンブリングを行う. なお, デスピンモータは搭載していない.

ロケットの追跡には、USC新精測レーダ(7m φ)及び旧精測レーダ(4m φ)(レーダ班)、テレメトリ取得には、 USCアンテナ群,宮崎ダウンレンジ局(新精測レーダによるスレーブ)、小笠原局(新精測レーダ→RGシステ ム→専用回線経由)、クリスマス島局(TEL/FAX経由)が予定されている.ロケットの軌道推定にはUSC 20m φ/34m φアンテナのデータは使用しない(RGとINGデータの比較は行う).クリスマス島局には、疑似ロック 監視装置が設置され、また、第3段テレメータを受信することで、東工大の第3段搭載サブペイロードの実験デー タを取得する.また、USCに加え、その他のJAXA地上局による追跡も予定されている.また、打上げてから1 周回後(90分後)のロケット第3段の追跡は行わない.

小笠原局,クリスマス島局,チリ大学サンチャゴ局とも,バックアップであり,打上げ条件にならない. 衛星 分離スイッチは搭載されておらず,クリスマス局受信はmustではない.

図2.1.2-1 にシーケンス図を、図2.1.2-2 にダウンレンジ - 高度図を、表2.1.2-1 にタイムシーケンス、表2.1.2-2 に目 標投入軌道を列記する.



Q

200sec 第2段分離 2nd stage separation

186sec 開頭 Nose fairing open

第2段制御 2nd stage control

75sec 第2段モータ点火 第1段分離 2nd stage ignition 1st stage separation

第1段制御 1st stage control

0sec 第1段モータ点火

1st stage ignition

à

自然

202sec 第3段ノズル伸展

3rd stage nozzle extension





1307sec 衛星分離 Spacecraft separation



Y+2days RCS制御 スピン低減 RCS control spin reduction



Y+4days 太陽電池パドル展開 SAP paddle deploy



Y+9days EOB伸展 X-ray Telescope Extention





図2.1.2-2 M-V-6号機ダウンレンジ-高度図

486

表2.1.2-1 M-V-6号機タイムシーケンス

★: M2-EPT 項目(固定): 点火管制装置より X-50 秒に起動,機上で変更可能(0.1 秒単位) ○: M3-EPT(固定): M2-EPT より X+197 秒に起動,取り外しの上変更可能(1.0 秒単位)

ター	イマ イベント	X相対	
タイ	イマ点火管制装置起動	-60秒	(標準時刻設備により起動)
\star	M2-EPT 起動	-50秒	(点火管制装置より M2·EPT 起動)
	SL-ANS	-49秒	(確認できるのは1秒後)
\star	B1-CONT スタート/NAV スタート	-48秒	
\star	M2-EPT ANS OK	30.5 秒	
	1段演算開始	30秒	
\star	1段MNTVC用SPGG点火	15秒	
\star	1段モータ点火	0秒	
\star	1段SMRC 点火	3秒	
	1段 MNTVC, SMRC 制御開始	3秒	
\star	計測 B1-V OFF	71秒	
\star	B1 テレメータアンテナ切替(1 段→2 段)	73秒	
\star	B2-CONT スタート	74秒	
\star	B1 計測(温度)メモリリセット	74秒	
\star	B2 計測(歪)メモリリセット	74秒	
\star	B3 計測メモリリセット	74秒	
	1 段制御終了(MNTVC, SMRC)	74.5 秒	(1段 MNTVC 舵角保持)
	ING1/2 段分離処理	74.6 秒	
\star	1/2 段分離	75秒	
\star	2段モータ点火	75秒	
\star	2段SMRC 点火	75.5 秒	
	2段MNTVC,2段SMRC制御開始	75.7 秒	
\star	TV カメラ窓リセット	110秒	
\star	2段SMSJ 点火	139 秒	
\star	3段SJパイロバルブ開	139 秒	
	2段 SMRC 制御終了, SMSJ 制御開始	139.5 秒	
	2 段燃焼終了	152 秒	
	M25TVC 制御終了	152 秒	
	2段レファレンスチェンジ開始	152.5 秒	
\star	TVカメラ切替	180秒	
\star	NF 開頭準備	181秒	
\star	計測 NF-V OFF	182 秒	
\star	NF 開頭	186秒	
	SMSJ 飽和値,レート加算比復帰	190 秒	(ファインモード)
\star	B3-CONT スタート	195 秒	
\star	計測 B3-V OFF	196秒	
\star	M3·EPT 起動	197 秒	(Y1+0秒)
\bigcirc	SL-ANS	198秒	(Y1+1秒)
	2段 $SMSJ$ 制御終了	199.5 秒	
	ING 2/3 段分離処理	199.6 秒	
\star	2/3 段分離	200 秒	

488

	3 段 SJ3 軸制御開始(ファインモード)	201秒	
\bigcirc	3段ノズル伸展	202 秒	(Y1+5秒)
	3 段 MNTVC ACT ロック解除	203 秒	
\bigcirc	3段ノズル伸展機構投棄	204秒	(Y1+7 秒) (マルマンバンド, 伸展スプリング)
	3段SJ一時休止	204.5 秒	
	3段MNTVC制御計算開始	204.5 秒	
\bigcirc	3段モータ点火	205 秒	(Y1+8秒)
	3段 MNTVC 制御開始	205.5 秒	
	SJ 制御再開, ロール制御開始	205.5秒	(ハイスラスト,間引き)
	ロール 90 度マヌーバ指令	207 秒	(精測レーダ用)
\star	M2-EPT 停止	215 秒	
\bigcirc	XRS-V6 OPEN	235 秒	(Y1+38秒) (ASTRO-EII)
	SJ ロースラストモードへ移行(間引き)	267 秒	
	SJ3 軸制御移行	306秒	(MNTVC 併用区間, ロール, SJ コースモード)
	3段燃焼終了	311秒	
	3段 MNTVC 制御終了	315秒	(MNTVC : 0[V]保持, SJ ファインモード)
	3 段 MNTVC ACT 再ロックコマンド指令	318秒	
	3 段 MNTVC ACT ロックシーケンス終了	344 秒	
	レファレンスチェンジ用 SJ パラメータ変更	345 秒	
	3段レファレンスチェンジ開始	347 秒	
	M34 サーボアンプ電源 OFF	410秒	
	3段レファレンスチェンジ姿勢反転終了	422秒	
	SJ 制御パラメータ変更,間引き制御開始	442秒	
	バーベキュースピン開始	447秒	
	ロール角0度指令	447.1秒	
	ロール角0度マヌーバ開始	899秒	
	間引き論理終了	1257 秒	
	SJ ファインモード開始	1261 秒	
	SJ3 軸制御終了,3段スピンアップ	1291 秒	(ロールレートコマンド)
\bigcirc	CM-ARMING (ASTRO-EII)	1305 秒	(Y1+1108 秒)
\bigcirc	INS-SAMODE 切換(ASTRO-EII)	1306秒	(Y1+1109秒)
	SJ オフ(スピン 5rpm 到達)	1306 秒	
\bigcirc	3段/衛星分離	1307 秒	(Y1+1110秒)
	3段デスピン開始	1307.5 秒	(デスピンモータは無し)
	3段デスピン終了	1316 秒	
	ピッチ軸タンブリング開始	1316 秒	(衛星に対してピッチ姿勢 90deg)
	ヨー軸タンブリング開始	1356 秒	(衛星に対してヨー姿勢 130deg)
	SJ ファインモード収束	1401 秒	
\bigcirc	サブペイロード分離許可信号	1421 秒	(Y1+1224 秒)
\bigcirc	M3-EPT 停止	1425 秒	(Y1+1228秒)
	SJファインモード終了,3段再スピンアップ	1451秒	(ロールレートコマンド)
	3段再スピンアップ終了,SJ制御終了	1461秒	(スピン 5rpm)
	サブペイロードデータ取得終了	クリスマス	A LOS まで

表2.1.2-2 M-V-6号機目標投入軌道

X+311sec	
semi-major axis (km)	6796.456
eccentricity ()	0.2305260 e - 01
inclination (deg)	31.99626
From Greenwich@Launch (打上	げ時のグリニッジ方向基準)
ascending node (L.omega) (deg)	30.36558
arg of peri (S.omega) (deg)	84.86588
long of peri(L+S.omega) (deg)	115.2315
mean anomaly (deg)	22.03637 (flight path angle ± 0.5 deg)

2.1.3. M-V-8号機の軌道計画

M-V-8号機は全段に姿勢制御機能を備えた3段式固体ロケット(全備重量約138トン)であり,ASTRO-F衛星(赤 外線天文衛星,約953 kg)を,近地点高度約288 km (条件:200 km以上),遠地点高度約760 km,軌道傾斜角 約984度に投入する.衛星分離時刻はX+519秒である.第1段は,発射方位角145度,上下角約82度で打上げ られ,ゼロリフト軌道を飛翔する.第1段分離(X+75秒時)時に迎角が極力生じないようにし,第2段は,南 方向へのドッグレッグを行なう.第2段燃焼終了後の頂点高度は約351kmに達する.最終段である第3段は,一 定姿勢で燃焼し,第3段燃焼終了は打上げ後309秒である.なお,誘導コマンドにより,第2段及び第3段のピッ チおよびヨー姿勢ターゲットが修正されることはあるが,第3段点火時刻等タイムシーケンスが飛行中に修正さ れることはない.第3段搭載のトランスポンダには受信レベルに基づく自動切替機能があるが,同じトランスポ ンダで確実に追尾するためにロールは第3段燃焼中に+90度制御(後ろから見て時計回り)する.第3段燃焼終 了後,USCの可視中に第3段SJによって,姿勢反転(X+347秒開始,X+400~422秒付近終了)を行う.これ は衛星の分離姿勢へ制御することが目的である.

X + 519秒における衛星分離後,ASTRO-F衛星は搭載推進系によって遠地点付近で近地点高度上昇用のΔV を行う.なお,衛星分離姿勢は,その機軸方向(衛星の+Z軸)が約45分後の遠地点における速度方向と一致す るように決定される.X + 519秒に衛星分離をし,X + 520秒にデスピンモータ点火によりデスピンを行なう. 第3段残留推力による衛星との衝突・コンタミ回避のために第3段は衛星分離後にタンブリングを行う.X + 1040秒に東工大サブペイロードの分離許可,X + 1100秒にソーラーセイルの展開を開始する.また,実験時間帯: 午前6~7時JSTである.図2.1.3-1にシーケンス図を,図2.1.3-2にダウンレンジ-高度図を,表2.1.3-1にタイムシー ケンス,表2.1.3-2に目標投入軌道を列記する.



図2.1.3-1 M-V-8号機フライトシーケンス



図2.1.3-2 M-V-8号機ダウンレンジ-高度図

490

表2.1.3-1 M-V-8号機タイムシーケンス

	イベント	MNTVC	SMRC/SMSJ	SJ
X+0s	1段モタ点火			
X+3s	SMRC 点火	○1 段 MNTVC 制御開始	○SMRC 制御開始	
X+74.5s	1段制御終了	制御終了	制御終了	
X+75s	1/2 段分離			
X+75.5s	2段SMRC点火			
X+75.7s	2 段制御開始	○2 段 MNTVC 制御開始	○SMRC 制御開始	
X+139s	SMSJ 点火	0	0	
X+139.5s	2 段 SMRC 制御終了,	0	○SMSJ3 軸制御開始	
	2段SMSJ制御開始			
X+151s	2 段燃焼終了	0	0	
X+152s	2 段 MNTVC 制御終了	制御終了	0	
X+152.5s	2 段レファレンスチェンジ開始		0	
X+185s	2 段レファレンスチェンジ終了		0	
X+186s	NF 開頭		0	
X+199.5s	SMSJ 制御終了		制御終了	
X+200s	2/3 段分離			
X+201s	3段SJ3 軸制御開始			○3 軸制御
X+203s	3段MNTVCACT ロック解除			0
X+204.5s	3段SJ一時休止			
X+205s	3段刊点火			
X+205.5s	3段SJ ロールレイスラストへ移行(再開)	3段MNTVC制御開始		on-li制御
	3段MNTVC制御開始			
X+306s	3段SJ3 軸制御開始	0		○3 軸
X+309s	3段燃焼終了	0		0
X+315s	3段MNTVC制御終了	制御終了		○3 軸
X+318s	3 段 MNTVC ACT 再ヮックコマント 指令			0
X+344s	3段MNTVCACT再ロックシーケンス終了			0
X+347s	レファレンスチェンジ 開始			0
X+400~422s	レファレンスチェンジ 終了			0
X+465s	3段SJ昇温噴射			0
X+499s	スピ [°] ンアップ開始			01-1
X+518s	スピンアップ終了, SJ 一時休止			
X+519s	衛星分離			
X+519.5s	3段SJデスピン開始(SJ再開)			0
X+520s	3段デスピンモータ点火			0
X+523s	デスピン終了			0
X+524.7s	3段ピッチタンブル開始			○3 軸

X+564.7s	3段ヨータンブル開始	0
X+750s	CUTE1.7 放出方向向けピッチ/ヨーマヌーバ	0
X+890s	RSAS 実験開始	0
X+950s	CUTE1.7 放出方向向けロールマヌーハ	0
X+1040s	CUTE1.7 放出	0
X+1050s	アンテナ指向ロールマヌーバ	0
X+1100s	ソーラーセル展開実験開始	0
X+1400s	再えピンアップ開始	01-11
X+1440s	終了	制御終了

表2.1.3-2 M-V-8号機目標投入軌道

X+519sec	
semi-major axis (km)	6902.24
eccentricity ()	0.034235
inclination (deg)	98.3960
From Greenwich@Launch (打上げ時	のグリニッジ方向基準)
ascending node (L.omega) (deg)	307.6897
argument of perigee(S.omega) (deg)	135.3844
mean anomaly (deg)	32.4869
apogee alt (km)	760.40
perigee alt (km)	287.81

2.1.4. M-V-7 号機の軌道計画

M-V-7号機は全段に姿勢制御機能を備えた3段式固体ロケット(全備重量約138トン)であり,SOLAR-B衛星(太 陽観測衛星,約879 kg)を,近地点高度約285 km (条件:200 km以上),遠地点高度約630 km,軌道傾斜角約 97.9度に投入する.衛星分離時刻はX+510秒である.第1段は,発射方位角150度,上下角約83度で打上げられ, ゼロリフト軌道を飛翔する.第1段分離(X+75秒時)時に迎角が極力生じないようにし,第2段は,南方向へ のドッグレッグを行なう.第2段燃焼終了後の頂点高度は約334kmに達する.最終段である第3段は,一定姿勢 で燃焼し,第3段燃焼終了は打上げ後311秒である.

なお,誘導コマンドにより,第2段及び第3段のピッチおよびヨー姿勢ターゲットが修正されることはあるが, 第3段点火時刻等タイムシーケンスが飛行中に修正されることはない.第3段搭載のトランスポンダには受信レ ベルに基づく自動切替機能があるが,同じトランスポンダで確実に追尾するためにロールは第2段燃焼終了後に +90度制御(後ろから見て時計回り)する.第3段燃焼終了後,USCの可視中に第3段SJによって,姿勢反転(X +347秒開始,X+400秒付近終了)を行う.これは衛星の分離姿勢へ制御することが目的である.

X + 510秒における衛星分離後,SOLAR-B衛星は搭載推進系によって遠地点付近で近地点高度上昇用のΔV を行う.なお,衛星分離姿勢は,その機軸方向(衛星の+Z軸)が約45分後の遠地点における速度方向と一致す るように決定される.X + 510秒に衛星分離をし,X + 511秒からコンタミ回避マヌーバを行なう.第3段残留 推力による衛星との衝突・コンタミ回避のために第3段は衛星分離後にマヌーバを行う.X + 830秒にHIT-SAT サブペイロードの分離許可,X + 990秒にSSSATサブペイロードの分離許可を行う.実験時間帯は午前6~7時 JSTである.なお,M-Vロケットの第3段機体,SOLAR-B衛星,および,第3段から分離されるサブペイロード (HIT-SAT, SSSAT)と軌道上物体との干渉について解析を実施し、干渉する恐れがある時間帯に対してロンチ ウィンドウを修正する.干渉解析作業は、統合追跡ネットワーク技術部が実施する.

図2.1.4-1 にシーケンス図を、図2.1.4-2 にダウンレンジ-高度図を、表2.1.4-1 にタイムシーケンス、表2.1.4-2 に目 標投入軌道を列記する.



図2.1.4-1 M-V-7号機フライトシーケンス



図2.1.4-2 M-V-7号機ダウンレンジ-高度図

	イベント	MNTVC	SMRC/SMSJ	SJ
X+0s	1段モタ点火			
X+3s	SMRC 点火	○1段MNTVC制御開始	○SMRC 制御開始	
X+74.5s	1段制御終了	制御終了	制御終了	
X+75s	1/2 段分離			
X+75.5s	2段SMRC 点火			
X+75.7s	2 段制御開始	○2段MNTVC制御開始	○SMRC 制御開始	
X+139s	SMSJ 点火	0	0	
X+139.5s	2段SMRC 制御終了	0	○SMSJ3 軸制御開始	
	2段SMSJ制御開始			
X+150s	2 段燃焼終了	0	0	
X+152s	2段MNTVC制御終了	制御終了	0	
X+152.5s	2 段レファレンスチェンジ開始		0	
X+185s	2段レファレンスチェンジ終了		0	
X+186s	NF 開頭		0	
X+199.5s	SMSJ 制御終了		制御終了	
X+200s	2/3 段分離			
X+201s	3段SJ3 軸制御開始			○3 軸制御
X+203s	3段MNTVCACT ロック解除			0

表2.1.4-1 M-V-7号機タイムシーケンス

X+204.5s	3段SJ一時休止		
X+205s	3段モウ点火		
X+205.5s	3段SJ ロールハイスラストへ移行(再開)	3段MNTVC制御開始	on-ル制御
	3段MNTVC制御開始		
X+306s	3段SJ3 軸制御開始	0	○3 軸
X+311s	3段燃焼終了	0	0
X+315s	3段MNTVC制御終了	制御終了	○3 軸
X+347s	レファレンスチェンジ開始		0
X+397s	3段MNTVCACT 再『ックコマント"指令		0
X+400s付近	レファレンスチェンジ終了		0
X+425s	M34 サーボアンプ 電源 OFF		0
X+456s	3段SJ昇温噴射		0
X+460s	切替線パラメータ Fine に変更		0
X+510s	衛星分離		
X+511s	コンタミ回避マヌーハ (S系P-80)		0
X+551s	コンタミ回避マヌーバ(S系Y+110)		0
X+650s	サブペイロード PSB/GPU ON		0
X+710s	ロールデット・ハント、5°		0
X+750s	HIT-SAT 放出方向へ向けてピッチ/ヨー/		○3 軸
	ロールマヌーハン開始		
X+830s	HIT-SAT 放出		0
X+840s	HIT-SAT 撮影用ローリレマヌーバ開始		0
X+852s	Dongara 0°AOS		
X+890s	HIT-SAT 撮影開始		
X+892s	Dongara 3°AOS		
X+950s	HIT-SAT 撮影終了		
	SSSAT 放出方向へ向けてマヌーバ開始		
X+990s	SSSAT 放出		0
X+1395s	Dongara 3°LOS		
X+1443s	Dongara 0°LOS		
X+1500s	De-orbit マヌーバ開始		0
X+1800s	De-orbit マヌーバ終了		
X+1900s	BBQ スピン開始(間引き制御開始)		
X+4600s	BBQ スピン終了,間引き制御終了		
	ファインモードに変更		
X+5000s	スピンアップ開始(ロールレート制御に変更)		
X+5040s	SJ停止		

表2.1.4-2 M-V-7号機目標投入軌道

X+510sec	
semi-major axis (km)	6845.92
eccentricity()	0.026508
inclination (deg)	97.9014
From Greenwich @ Launch (打上げ時	のグリニッジ方向基準)
ascending node (L.omega) (deg)	308.6573
argument of perigee (S.omega) (deg)	142.4239
mean anomaly (deg)	25.61255
apogee alt (km)	649.25
perigee alt (km)	286.31

2.2. M-Vロケットの風補正

打上げ時の風速・風向を予測して、最終投入軌道を変更することなく、機体にかかる荷重を軽減するようにロ ケットの姿勢ターゲット (ランチャ角度を含む)を最適化する.図2.2-1に風補正におけるデータの流れを記す.



図2.2-1 M-Vロケット風補正の手順

2.2.1. ヴァイサラゾンデによるUSC観測風

ゾンデに搭載されたGPSの位置計測に基づく風観測を行う. 観測可能な高度は地表面から高度約30km (10hPa 相当)におよぶ.表2.2.1-1~4に各号機のゾンデ観測実績を,図2.2.1~4に観測風の風速データを列記する.

表2.2.1-1 M-V-5号機フライトオペレーション中のゾンデによる風観測

2003年4月26日	10:00JST	正常
2003年4月28日	09:30JST	正常
2003年4月30日	09:30JST	データ欠損
2003年5月01日	09:30JST	正常
2003年5月03日	09:30JST	正常
2003年5月05日	09:30JST	正常
2003年5月08日	08:30JST	正常(予備機と合わせて2台で受信)
2003年5月09日	08:30JST	正常(X-3時間相当)

表2.2.1-2 M-V-6号機フライトオペレーション中のゾンデによる風観測

2005.06.22. 09:30 JST,	曇り	正常
2005.06.22. 12:30 JST,	曇り	正常
2005.06.24. 09:30 JST,	小雨	正常
2005.06.24. 12:30 JST,	曇り	正常
2005.06.26. 09:30 JST,	雨, 晴れ,	雨,風データ取得できず
2005.06.26. 12:30 JST,	曇り	正常
2005.06.28. 09:30 JST,	快晴	正常
2005.06.28. 12:30 JST,	快晴	正常
2005.06.30. 09:30 JST,	晴れ	正常
2005.06.30. 12:30 JST,	晴れ	正常
2005.07.03. 07:30 JST,	小雨	正常
2005.07.04. 09:30 JST,	小雨	正常
2005.07.06. 07:35 JST,	強風, 大雨	う バルーンが浮上せず
2005.07.06. 08:10 JST,	強風, 大雨	ī 浮力大,初期 1m/s,後半 5m/s
2005.07.10.07:30 JST,	晴れ	正常
2005.07.10. 15:30 JST,	晴れ	正常

表2.2.1-3 M-V-8号機フライトオペレーション中のゾンデによる風観測

放球地点:M台地 放球日時 ゾンデ* 放球点天候 到達高度** 2006/02/01/06:30 **RS80** 雨 12.943km 2006/02/02/06:30 **RS80** 晴れ 25.173km 2006/02/03/06:30 **RS80** 小雨 25.309km 2006/02/04/06:30 **RS80** 晴れ 15.212km 2006/02/05/06:30 **RS80** 晴れ 23.815km 2006/02/06/06:30 **RS80** 小雨 24.065km 2006/02/07/06:30 **RS80** 曇り 13.769km 2006/02/08/06:30 **RS80** 曇り 20.213km 2006/02/09/06:30 **RS80** 晴れ 23.376km **RS80** 25.285km 2006/02/10/06:30 晴れ 2006/02/11/06:30 **RS80** 晴れ 23.642km 曇り 2006/02/12/01:30 **RS80** 24.467km 2006/02/13/06:30 晴れ 23.439km **RS80** 2006/02/14/06:30 **RS80** 曇り 25.310km 2006/02/15/06:30 **RS80** 曇り 25.602km 2006/02/16/06:30 **RS80** 曇り・強風 26.693km 2006/02/17/06:30 **RS80** 晴れ 25.516km 2006/02/18/06:30 **RS92** 曇り 18.153km 2006/02/19/06:30 **RS92** 曇り 21.632km 2006/02/20/06:30 **RS92** 小雨 25.022km 26.597km 2006/02/20/21:30 **RS92** 曇り 2006/02/21/01:30 **RS92** 曇り 23.376km (90分) 2006/02/21/04:00*** **RS92** 曇り 13.939km (55分) 2006/02/21/21:30 **RS92** 晴れ 21.521km (90分) 22.077km (90分) 2006/02/22/01:30 **RS92** 晴れ 2006/02/22/04:00*** 13.893km (65分) **RS92** 晴れ 2006/02/22/09:30 晴れ **RS92**

* RS80:旧ゾンデ RS92:新ゾンデ

** ゾンデから送信される風データを正常に受信できた最大到達高度

*** KS 台地より放球

表2.2.1-4 M-V-7号機フライトオペレーション中のゾンデによる風観測

放球日時	ゾンデ	放球点天候	到達高度**
2006/09/05/06:30	RS92	晴れ	25.811km
2006/09/06/06:30	落雷・停電のため	 中止	
2006/09/07/06:30	RS92	くもり	26.046km
2006/09/08/06:30	RS92	晴れ	23.280km
2006/09/09/06:30	RS92	晴れ	19.152km
2006/09/10/06:30	RS92	くもり	25.436km
2006/09/11/06:30	RS92	くもり	29.209km
2006/09/12/06:30	RS92	雨	24.386km
2006/09/13/06:30	RS92	晴れ	21.313km
2006/09/14/06:30	RS92	くもり	29.488km
2006/09/15/06:30	RS92	くもり	26.968km
2006/09/16/06:30	RS92	くもり	24.499km
2006/09/17/06:30	台風13号接近のた	こめ中止	
2006/09/18/06:30	台風13号接近のた	こめ中止	
2006/09/18/13:00	RS92	晴れ	29.326km
2006/09/19/06:30	RS92	晴れ	27.979km
2006/09/19/21:30	RS92	晴れ	20.066km (90分)
2006/09/20/01:30	RS92	くもり	20.333km (100 分)
2006/09/20/04:00*	RS92	くもり	13.162km(60 分)
2006/09/20/06:45*	RS92	くもり	28.487km
2006/09/21/06:30	RS92	小雨	20.392km
2006/09/22/06:30	RS92	晴れ	28.148km
2006/09/22/21:30	RS92	晴れ	18.764km(90分)
2006/09/23/01:30	RS92	くもり	21.084km (100 分)
2006/09/23/04:00*	RS92	くもり	15.664km (70分)
2006/09/23/06:51*	RS92	くもり	21.866km (X+15分)

* KS 台地より放球

** ゾンデから送信される風データを正常に受信できた最大到達高度



図2.2.1-1 M-V-5号機フライトオペレーションにおける放球データ



図2.2.1-2 M-V-6号機フライトオペレーションにおける放球データ



図2.2.1-3 M-V-8号機フライトオペレーションにおける放球データ



図2.2.1-4 M-V-7号機フライトオペレーションにおける放球データ

2.2.2. 気象庁/日本気象協会によるUSCの予測風

風の数値予報は、日本付近のおよそ4000km四方を覆う数値予報モデルをもとに1日2回、0時UTC(9時JST) と12時UTC(21時JST)を初期時刻として気象庁数値予報課によって行われている.このGPV(Grid Point Value)データの日本気象協会による数値的な加工(空間的/時間的補間)を経て、USC上空(北緯31.25度、東経 131.08度)の予測値を1日に2回電子メールを通して入手する.具体的には、1)USC上空に空間内挿し、打上げ 時刻に時間内挿した鉛直分布(これが基本)、2)USC上空に空間内挿した3時間毎の鉛直分布(0~30km)、3) USC付近を中心に東西3格子×南北3格子の計9格子の鉛直分布が含まれる.打上げ日の最終判断には、(例えば M-V-7号機では)打上げ日の14:25 JST頃に送られてくる9時JST(0時UTC)ベースの27時間後予測風(打上げ 時刻6:30 JST付近)を使う.これらの予報値は、ゾンデによる実観測データと比較検証され、最終的に空力荷重 低減を目的としたロケット姿勢ターゲットの最適化計算に反映される.表2.2-1に数値予報モデルについてまと める.このうち、使用されるのは領域モデルである.図2.2.2-1~2には、M-V-8号機および7号機における予報 風と実測風の比較を示す.

モデル	全球モデル	領域モデル	メソモデル
項目	(GSM)	(\mathbf{RSM})	(MSM)
領域	全球	(20N,120E) - (50N,150E)	(26N,120E) - (44N,150E)
水平解像度	赤道付近で 1.25 度(約 138	東西 0.25 度×南北 0.2 度	東西 0.125 度×南北 0.1 度
(地上)	km) \mathcal{O} thinned grid	(約22km×22km)	(約11km×11km)
水平解像度	地上に同じ	東西0.5度×南北0.4度	東西 0.25 度×南北 0.2 度
(上空)		(約 45km×44km)	(約22km×22km)
00UTC 予測	84時間先迄6時間毎	51時間先迄1時間毎(地上),	18時間先迄1時間毎(地上),
		<u>3時間毎(上空)</u>	3時間毎(上空)
06UTC 予測	なし	なし	00UTC に同じ
12UTC 予測	96時間先迄6時間毎,	00UTC に同じ	00UTC に同じ
	192 時間先迄 12 時間毎		
18UTC 予測	なし	なし	00UTC に同じ
配信時刻	15:15頃(00UTC 予報)	14:25頃(00UTC 予報)	11:30頃(00UTC予報)
(JST)	04:00頃(12UTC 予報)	02:25 頃(12UTC 予報)	17:30頃(06UTC 予報)
			23:30頃(12UTC 予報)
			05:30頃(18UTC 予報)
計算上端	0.4 hPa	10 hPa	10 hPa

表2.2-1 気象庁/日本気象協会数値予報モデル

502



図2.2.2-1 M-V-8号機打上日における実測風と予測風の比較(風速)



図2.2.2-2 M-V-7号機打上日における予測風と実測風の比較(風速)

2.2.3. イギリス気象庁 (UKMO)高層風データ

イギリス気象庁(UKMO)の衛星観測データの電子的配信システムを利用し、高度30kmから57kmの高層風 予測として用いる.UKMOデータは、1)NOAA衛星の大気温度データをもとに、UKMO(United Kingdom Meteorological Office)が物理過程を考慮した大循環モデルによって数値的に算出した高層(~60km = 0.4hPa) の風データを、内之浦上空用に空間的に補間して用いる.2)UARS(Upper Atmosphere Research Satellite)が 観測したデータではなく、UARSの観測データのcalibration用にUKMOが基準大気モデルとして作成している. 3)データは1日に1回配信.誤差は約10%.また、高度方向10km程度の平均的な風と考えるべきである.経度・ 緯度のグリッド間隔は 3.75°×2.5°.また、鉛直方向には約2.5 kmの間隔である.

2.2.4. 打上げ直前の姿勢ターゲット修正による風補正

発射当日に,発射時刻での風予報値(0~30kmは気象庁予報値,30~57kmはUKMO)に基づいて,姿勢ター ゲットを最適化する.評価関数としては,剛体空力荷重(動圧×法線力係数傾斜×迎角)の2乗の第1段飛翔中の 時間積分値をとり,これを最小化するべく姿勢ターゲットを非線形計画法(NLP)に基づく計算手法により最適 化する.制御変数としては,第1段の姿勢ターゲット(ピッチ/ヨー:計24変数)である.第1段の姿勢ターゲッ トのノードとしては12点(初期姿勢=ランチャ角)ある.終端拘束条件としては,以降の軌道をノミナルに保持 する目的で,第1段燃焼終了時の高度,速度,経路角,方位角を考え,また,姿勢(ピッチ/ヨー)の最大・最小 値(過大な修正の回避),Fire In The Hole時(第1段分離時)迎え角=0度等も考慮する.なお,ランチャ方位 角の物理的な限界は85~155度である.また,ハードウェア側からのランチャ上下角制約は78~90度であり, "レール離脱~ブーム抜け間のブームの干渉チェック"の検討結果より86度以下が望ましいことを示唆している ために,実質的な発射角範囲は78~85度に制限される.ランチャ角修正範囲は±1度程度とする.なお,定常 風としては15m/s以下が判断基準であり,瞬間20m/sの風が発生する場合は履歴に応じて判断する.

2.2.4.1. 打上げ前日の空力荷重解析と打上げの是非の判断

- a) 突風 に起因する荷重.まず,荷重を発生しない標準風とそれに対応する姿勢ターゲットを用意する.各高 度ごとに,gust 強さをsynthetic wind profileで規定されている6.7m/sにマージンを見込んで10m/sとし, gust 高度幅を,60~300mの範囲でsweepし,最大の荷重を発生する高度幅を見いだして,各高度におけ る (言い換えれば各時刻)での荷重増加量としてあらかじめ求めておく.
- b)風の高周波成分(微細構造)に起因する荷重.ゾンデによる観測風にたいして,荷重を極力発生しない姿勢ター ゲットを求める.その姿勢ターゲットのもとで,荷重の算定を行う.これが,高周波成分(微細構造)起因 の荷重増加分であり,これを回数は限られているが、3 σ レベルの荷重増加量のプロファイルを時間(等価 的に高度) wise に求めておく.微細構造としては、バルーンとゾンデの振り子運動モデルを考慮した上で, 高度方向10~15m程度の計測ができている.但し、これは微細構造といって、突風とは別に(観測高周波 成分として)考慮しているものである.
- c) a) + b)を求め, 各時刻ごとのgust + 微細構造にともなう荷重増加量として用意する.
- d)発射当日に,発射時刻での風予報値(0~30kmは気象庁予報値,30~57kmはUKMO)に基づき,姿勢ター ゲットを求める.これにより,発射時刻における低周波成分の風に対しては荷重はほとんど発生しないよう にできているはずである.3σ分散の誤差(12時間予報の3σ=15m/s,24時間予報の3σ=20m/s)を考慮 して正負双方の定常風プロファイルを用意し、荷重計算を行う.得られた結果に、c)で用意した荷重増加量 を加えて、許容荷重内であれば、タイムスケジュールに入ることは可能と判断する.

- e)同時に、X-3時間時点(X-5時間に放球)での風予報値に対して、荷重計算を行う.当然、風予測のトレンドの分だけ荷重は増加するはずであるが、発生する荷重が小さい(言い換えればc)を加えてなお許容荷重内におさまる)ことはトレンドが急激でないことの傍証でもあるので、これもタイムスケジュール入りを判定する指標となりうる。
- f) X-3時間時点(X-5時間に放球)の風を計測(ゾンデ観測風)し、それに対して荷重計算を行う.e)の結果と整合することと、e)およびf)での荷重がいずれも小さいことが、発射可能かどうかの判定条件である。もっとも簡単には、この荷重にc)を加えてなお許容荷重内にあればOKとする。e)で求めておいたトレンドを利用すると、定性的にはX時の荷重を推定することもある程度可能で、これにより発射の確率をあげることが可能である。
- g) 打上げ後(X+3時間)にも、ゾンデにより風を計測し、風の傾向を確認する.

2.2.4.2. 空力荷重解析(まとめ)

予め,平均風に対して最適化した(荷重を発生しない)姿勢ターゲットを用意し,10m/sの突風に対する荷重 増加量を求める.この際,突風の高度幅を10~300mの範囲でスイープし,機体曲げ周波数とカップリングし て荷重が最大となる高度幅を見い出し,突風による最大荷重増加量とする(M1).

フライトオペ中の数回のゾンデによる観測風をもとに,高周波成分(微細構造)による荷重増加量を求める. この際,観測回数は限られているが,3 σ レベルの荷重増加量プロファイルを時間(等価的に高度)ごとに求め て置く (M2).

フライトオペ中に観測した風速より3σ分散の誤差を考慮して,正負双方の定常風プロファイルを用意し,こ れによる最大荷重増加量を求める (M3).

燃速,抵抗係数の各条件のバラツキにより発生する1段飛翔中の荷重増加量を,予め求めておく (M4, M5). 下記の式でトータル荷重を求め,構造設計上の許容値と比較する.

トータル荷重=M1+M2+RSS (M3, M4, M5)

M1:突風による最大荷重増加量

M2:高周波成分(微細構造)による最大荷重増加量

M3: 定常風の3 σ分散による最大荷重増加量

M4: 燃速変動による荷重増加量

M5:抵抗係数変動による荷重増加量

表2.2.41~4に上記の最適化の結果設計された各号機のランチャ角を含む第1段の姿勢ターゲットデータを示す.

表2.2.4-1 M-V-5号機フライト用姿勢ターゲット(実際に使用されたフォーマット)

pitch & yaw target (for CNE group)

* file: (Target Parameter)

*

2003.05.09. H.Yamakawa: for M·V·5(MUSES·C) flight

* launcher angle azimuth (deg) 90.155 \rightarrow 90.2 deg(ランチャセット角:方位角) * launcher angle elevation (deg) 80.767 \rightarrow 80.8 deg(ランチャセット角:上下角)

*SUM

41

*Item No.	time(msec)	roll(deg)	pitch(deg)	yaw(deg)
0	-2147483648	0.00	80.7667	0.0249
1	-30000	0.00	80.7667	0.0249
2	-15100	0.00	80.7667	0.0249
3	-15000	0.00	75.7667	-4.9751
4	-10000	0.00	75.7667	-4.9751
5	-9900	0.00	80.7667	0.0249
6	3000	0.00	80.7667	0.0249
7	5000	0.00	77.1787	1.2937
8	7000	0.00	74.5352	0.8376
9	11000	0.00	67.9210	0.0017
10	17000	0.00	62.0745	-0.0050
11	23000	0.00	57.5143	-0.5148
12	29000	0.00	54.6305	-0.1149
13	35000	0.00	52.0020	0.3532
14	41000	0.00	49.2877	0.8246
15	50000	0.00	44.5835	0.3213
16	60000	0.00	40.7714	0.5524
17	75000	0.00	35.0005	0.5059
	(以降省略)			
*******	*****	*****	******	******
Er	nd of File			
***	****	****	****	· * * * * * * * * * * * * * * * * * * *

506

表2.2.4-2 M-V-6号機フライト用姿勢ターゲット(実際に使用されたフォーマット)

pitch & yaw target (for CNE group)

***************************************	:**
---	-----

- * file: (Target Parameter)
- *

2005.07.10.12:30 H.Yamakawa: for M-V-6 (ASTRO-EII) flight

*]	launch	er ang	le azimı	uth (d	eg)	87.601
-----	--------	--------	----------	--------	-----	--------

* launcher angle elevation (deg) 80.192

*SUM

56

*Item No.	time(msec)	roll(deg)	pitch(deg)	yaw(deg)	
0	-2147483648	0.00	80.2000	-0.4085	
1	-30000	0.00	80.2000	-0.4085	
2	-15100	0.00	80.2000	-0.4085	
3	-15000	0.00	75.2000	-5.4085	
4	-10000	0.00	75.2000	-5.4085	
5	-9900	0.00	80.2000	-0.4085	
6	3000	0.00	80.2000	-0.4085	
7	5000	0.00	80.1539	-1.3104	
8	7000	0.00	74.1410	-1.7574	
9	11000	0.00	69.9859	1.7601	
10	17000	0.00	66.5151	0.5468	
11	23000	0.00	61.6684	0.9369	
12	29000	0.00	57.7927	0.5112	
13	35000	0.00	53.9385	0.5328	
14	41000	0.00	51.1391	0.6171	
15	50000	0.00	47.1510	0.5575	
16	60000	0.00	42.1181	0.8878	
17	75000	0.00	37.2619	0.9107	
	(以降省略)				
*****	*****	*****	*****	*****	*******

End of File

yaw angle 0 deg is 90 deg from north in clockwise direction at launcher point

表2.2.4-3 M-V-8号機フライト用姿勢ターゲット(実際に使用されたフォーマット)

pitch & yaw target (for CNE group)

file: (Target Parameter)

2006.02.22.06[:]28.JST H.Yamakawa[:] for M·V·8 (ASTRO·F)

* launcher angle azimuth (deg) 142.98

* launcher angle elevation (deg) 81.497

*SUM

*

*

84

Item No.	time(msec)	roll(deg)	pitch(deg)	yaw(deg)	
0	-2147483648	0.00	81.5022	-0.2991	
1	-30000	0.00	81.5022	-0.2991	
2	-15100	0.00	81.5022	-0.2991	
3	-15000	0.00	76.5022	-5.2991	
4	-10000	0.00	76.5022	-5.2991	
5	-9900	0.00	81.5022	-0.2991	
6	3000	0.00	81.5022	-0.2991	
7	5000	0.00	81.5022	-1.4956	
8	7000	0.00	78.2426	-0.8411	
9	11000	0.00	74.0355	3.6740	
10	17000	0.00	67.8330	5.9533	
11	23000	0.00	64.5363	7.7290	
12	29000	0.00	62.3427	10.3796	
13	35000	0.00	60.5754	12.0283	
14	41000	0.00	58.5762	14.5169	
15	50000	0.00	53.4310	13.2938	
16	60000	0.00	47.8470	14.9853	
17	75000	0.00	45.2337	16.2956	
	(以降省略)				
*******	*****	************	**********	******	*******

End of File

yaw angle 0 deg is 145 deg from north in clockwise direction at launcher point

表2.2.4-4 M-V-7号機フライト用姿勢ターゲット(実際に使用されたフォーマット)

pitch & yaw target (for CNE group)

- * file: (Target Parameter)
- * 2006.09.23.06:30.JST S.Nonaka: for M-V-7 (SOLAR-B)

* launcher angle azimuth (deg) 149.28

* launcher angle elevation(deg) 81.999

*SUM

```
96
```

Item No.	time(msec)	roll(deg)	pitch(deg)	yaw(deg)	
0	-2147483648	0.00	82.0000	-0.1000	
1	-30000	0.00	82.0000	-0.1000	
2	-15100	0.00	82.0000	-0.1000	
3	-15000	0.00	77.0000	-5.1000	
4	-10000	0.00	77.0000	-5.1000	
5	-9900	0.00	82.0000	-0.1000	
6	3000	0.00	82.0000	-0.1000	
7	5000	0.00	82.0000	-0.5000	
8	7000	0.00	78.1414	-0.4722	
9	11000	0.00	73.9746	-0.9369	
10	17000	0.00	67.4971	-1.3808	
11	23000	0.00	63.1622	-1.7535	
12	29000	0.00	59.0460	0.1171	
13	35000	0.00	56.6715	1.9553	
14	41000	0.00	52.9353	2.3361	
15	50000	0.00	48.6962	1.0386	
16	60000	0.00	44.0990	-1.6155	
17	75000	0.00	41.1737	0.5059	
	(以降省略)				
********	******	********	******	*******	*******
* En	d of File				
********	*****	********	******	*****	******

yaw angle 0 deg is 150 deg from north in clockwise direction at launcher point

2.2.5. M-V ロケット組立オペレーション・フライトオペレーションにおける OP 班作業

表2.2.5-1に軌道計画・風補正に関わる組立オペレーションおよびフライトオペレーション中の作業の概要を示 す.また、表2.2.5-2~5には、各号機の実際の詳細な運用実績を記す.

表2.2.5-1 組立およびフライトオペレーション中の作業項目

組立オペレーション以前の作業概要

- ・ノミナル軌道計画の設計
- ・タイムシーケンスの策定(タイマ班,TVC班,CNE班等の支援)
- ・衛星・ロケット軌道インターフェース(衛星班の支援)
- ・打上げウィンドウ、打上げ時刻の策定(衛星班の支援)
- ·風計測,風予報作業練習
- 組立オペレーション時の作業概要
 - ・ノミナル軌道計画の確認
 - ・ゾンデによる風計測システムの健全性の確認
 - •

フライトオペレーション時の作業概要

- ・日本気象協会風予報データの受信
- ・イギリス気象庁データの取得
- ・ゾンデによる風計測
- ・発射時の予測風に基づく姿勢ターゲット・フライト用軌道計画の最適化
- ・ランチャ角度の決定

表2.2.5-2 M-V-5 号機打上日のOP (風補正)班運用実績

02:45JST	風予測データを日本気象協会が送信(JWA→野中, 小川, 山川)
03:00JST	配車(野中,小川,藤田,山川)
03:30JST	気象庁データを受信(野中,小川,山川)
03:45JST	気象庁+UKMO+GRAM95 風データを加工(野中)
04:00JST	姿勢ターゲット最適化計算開始(山川)
05:00JST	姿勢ターゲット最適化計算終了(山川)
05:30JST	姿勢ターゲット確認終了(野中,小川,藤田,山川)
06 : 00JST	CNE, TVC 班に送付(山川)
06 : 00JST	配車(CNE 班, IA 大塚)
06 : 00JST	CNE, TVC 班シミュレーションによる姿勢制御/荷重確認
	(IA 大塚, MPC 後藤)
06:30JST	移動(コントロール→M 管制室)(野中,小川,藤田,山川)
07:00JST	姿勢ターゲット RAM 書換および確認(MPC 江西,ISAS 山川)
	最も遅くて 09:00JST までで OK
08:00JST	ランチャ角をランチャ班へ連絡(山川)
08:30JST	配車(前田,石井,周東,NAS 渋谷,迫田,古林)
08:30JST	ヴァイサラゾンデ放球(感應寺,野中,小川,山川,VAISALA)
09:00JST	UKMO データ取得(延期時のため、周東)
10:15JST	VAISALA データ取得停止(高度 19km 程度)(VAISALA)
10:30JST	放球データを CNE, TVC, LA 班へ送付(野中)
11:30JST	CNE, TVC 班シミュレーションによる姿勢制御/荷重確認(IA 大塚, MPC 後藤)
12:00JST	昼食@コントロール・センター
13:00JST	RS 4 系統点呼
13:00JST	RG 系最終チェック(担当:前田,石井,山川,NAS 迫田,古林,渋谷)
13:00JST	USC RG 山川から相模原 SSOC 加藤隆二先生に連絡
13:20JST	USC RG 古林から小笠原局三浦へ連絡
13:20JST	RS4系統最終点呼
13:30JST	M-V-5/MUSES-C 打ち上げ(X,±15 分程度変化する)
13:40JST	小笠原ダウンレンジの受信終了確認
13:50JST	B3•B4 分離時の軌道出力(安定性,ピッチ,ヨー,タイムコマンドの確認)
	ONWAY による4段燃焼終了時の軌道推定(NAS 古林)
13:50JST	第3段分離直前の姿勢,RG コマンド受信データの受領@コントロール
	C4RG タイムコマンドの受領@コントロール・センター
14:00JST	SSOC 送信用 FAX の作成(山川)
	NAS 迫田, 古林←→山川間の FAX 内容の確認
14:10JST	SSOC 軌道決定グループ(加藤(隆),吉川,市川,FJT 大西)へ
	TOD-EQ 座標系(Keplerian+C3+Local)における4段燃焼終了時の軌道
	推定結果を FAX,で報告(山川,石井,前田)
	34m
14:20JST	J2000-EQ 座標系へ変換の後、JPL/DSN への軌道推定結果報告

表2.2.5-3 M-V-6号機打上日のOP(風補正)班運用実績

2005年7月10日	
02:15JST	風予測気象庁データを日本気象協会が送信(JWA→野中,山川)
03:30JST	配車(野中,山川)
03:40JST	気象庁データを受信(野中,山川)
03:50JST	気象庁+UKMO+GRAM99 風データを加工(野中)
04:00JST	姿勢ターゲット最適化計算開始(山川)
04:40JST	姿勢ターゲット最適化計算終了(山川)
04:50JST	姿勢ターゲット確認終了(野中,山川)
05:00JST	TVC 班にランチャ角 80.2deg と 82.0deg ターゲットを送付(山川)
05:30JST	CNE 班, TVC 班がランチャ角 80.2deg ターゲットを選択
05:55JST	CNE 班,TVC 班,LA 班に送付(山川)ランチャ角含む
06:00JST	CNE, TVC 班シミュレーションによる姿勢制御荷重確認(後藤, 大塚, 峯杉)
06:30JST	移動(コントロール→M 管制室)(野中,小川,山川)
07:00JST	姿勢ターゲット RAM 書換および確認(MPC 江西,ISAS 山川)
07:30JST	ヴァイサラゾンデ放球(感應寺, 野中, 山川, VAISALA)
09:15JST	VAISALA データ取得停止(高度 19km 程度)(VAISALA)
09:30JST	放球データを CNE, TVC, LA 班へ送付(野中)
10:30JST	CNE, TVC, LA 班による姿勢制御/荷重確認(大塚, 後藤)
12:00JST	RS 4 系統点呼
12:00JST	RG 系最終チェック(担当:前田,石井,山川,NAS 迫田,古林,渋谷)
12:00JST	USC RG 山川から相模原局加藤隆二先生へ連絡.
12:00 JST	USC RG 長江からクリスマス局橋本先生へ連絡.
12:10JST	USC RG 古林から小笠原局長木へ連絡.
12:20JST	RS 4 系統最終点呼
12:30JST	M·V·6/ASTRO-EII打ち上げ(12:30、12:45、13:00の3ケースのみ)
	石井 (2, 4 系統), 前田 (2, 4 系統), 山川 (4 系統), 迫田 (4 系統),
	小川(4系統)、山田(飛跡)、野中(テレメータ台地)
	2 段終了後,相模原,小笠原,クリスマスに状況報告 (X+180 秒)
	3 段終了後、相模原、小笠原、クリスマスに状況報告(X+320 秒)
	クリスマス局/SSOC 用, 6 要素ディスプレイをハードコピー (X+330 秒)
	クリスマス局/SSOC 用, 6 要素ディスプレイをハードコピー (X+400 秒)
	SSOC. クリスマス局送信用 FAX の作成(山川、X+430~500秒)
	電話でクリスマス局に6要素報告(長江, X+500~600秒)
	電話でSSOC に 6 要素報告(山川、X+500~600 秒)
	NAS 松岡 34m ゅ アンテナからコントロールに移動 (X+600 秒)
	FAX のコピー5 部 (松岡, 的川, 三保, RG 班用) (野中, X+600~660 秒)
	NEC 松岡に FAX1 部渡す (石井、 $X+660$ 秒)
	クリスマス局、相模原局に FAX 送信(野中、X+650~850 秒)
	小笠原スレーブデータ出力。 クリスマス局への情報のため RG 計算機自体
	はX+1700秒頃まで停止せず.
12:20JST	SSOC にて J2000・EQ に変換し、新 GN 局アンテナ予報値. USC 34m & /20m
	堂谷先生からチリ大学サンチャゴ局に軌道情報の連絡
13:20JST	J2000-EQ 座標系へ変換の後、NASA への動道推定結果報告(満田先生)
15:30JST	ヴァイサラゾンデ放球(感應寺、野中、山川、VAISALA)

表2.2.5-4 M-V-8号機打上日のOP (風補正)班運用実績 2006年2月21日 風予測気象庁データを日本気象協会が送信(JWA→野中,山川) 14:13JST14:13JST気象庁データを受信(野中,山川) 14:43JST気象庁+UKMO+GRAM99風データを加工し、CNE 班、TVC 班、構造班に送付(野中) 14:45JST 姿勢ターゲット最適化計算開始(山川) 上下角 81.0 度, 81.5 度, 82.0 度, 82.5 度, 83.0 度の5 ケースを計算し, CNE 班, TVC 班, 構造班, LA 班にランチャ角・姿勢ターゲットを送付(山川) 16:36JST姿勢ターゲット最適化計算終了(山川) 17:00JST英国気象庁データを受信(UKMO→周東) 17:00JSTCNE 班, TVC 班, 構造班が荷重計算, 制御解析を開始(後藤, 大塚, 峯杉) 19:56JSTCNE 班, TVC 班がランチャ角 81.5 deg ターゲットを選択 21:30JST ゾンデ放球(感應寺,野中,山川) 23:00JST ゾンデデータ取得停止(高度 21.5 km 程度) 23:14JST放球データを CNE, TVC, LA 班へ送付(野中) 23:30JST 観測風と予測風の比較(野中) CNE 班, TVC 班, 構造班が荷重計算, 制御解析を実施 23:54JST2006年2月22日 00:40JST移動(コントロール→M 管制室)(山川) 01:28JST 姿勢ターゲット RAM 書換および確認(MPC 江西,IA 大塚,ISAS 山川) ゾンデ放球(感應寺,野中,山川) 01:30JST02:00JSTゾンデ放球 (バックアップ) は実施せず. 02:13JST風予測気象庁データを日本気象協会が送信(JWA→野中,山川) 02:13JST気象庁データを受信(野中、山川) 03:00JST ゾンデデータ取得停止(高度 22.0 km 程度) 放球データを CNE, TVC, LA 班へ送付(野中) 03:10JST 03:20JST観測風と予測風の比較(野中) 03:50JST CNE 班, TVC 班, 構造班が荷重計算, 制御解析を実施 04:00JSTゾンデ放球(感應寺,野中,山川)

- 04:07JST ゾンデデータ取得停止(高度 14.0 km 程度)
- 05:13JST 放球データを CNE, TVC, LA 班へ送付(野中)
- 05:30JST 観測風と予測風の比較(野中)
- 05:46JST CNE 班, TVC 班, 構造班が荷重計算, 制御解析を実施
- 09:30JST ゾンデ放球(感應寺,野中,山川)

表2.2.5-5 M-V-7号機打上日のOP (風補正)班運用実績

2006年9月22日

- 12:59JST 風予測気象庁データを日本気象協会が送信(JWA→野中,山本,山川)
- 12:59JST 気象庁データを受信(野中,山本,山川)

.....

- 13:10JST JWA+UKMO+GRAM99 風データを加工し、CNE 班, TVC 班, 構造班に送付(野中)
- 13:10JST 姿勢ターゲット最適化計算開始(野中,山本,山川)
- 上下角 81.0 度, 81.5 度, 82.0 度, 82.5 度, 83.0 度の 5 ケースを計算
- 14:03JST 姿勢ターゲット最適化計算終了(野中,山本,山川)
 - CNE 班, TVC 班, 構造班, LA 班にランチャ角・姿勢ターゲットを送付(野中)
- 14:15JST CNE 班, TVC 班, 構造班が荷重計算, 制御解析を開始(後藤, 大塚, 峯杉)
- 14:22JST 予測風データ(3時間毎)の推移確認(大南)
- 17:04JST CNE 班, TVC 班がランチャ角 82.0deg ターゲットを選択
- 21:30JST ゾンデ放球 (感應寺, 野中, 大南, 三浦)
- 23:00JST ゾンデデータ取得停止(高度 18.8 km 程度)
- 23:16JST 放球データを CNE, TVC, LA 班へ送付(野中)
- 23:38JST 観測風と予測風の比較(三浦)
- 2006年9月23日
- 00:40JST CNE 班, TVC 班, 構造班が荷重計算, 制御解析を実施し, 結果を送信
- 00:50JST 移動(コントロール→M 管制室)(山川,山本,三浦)
- 00:59JST 風予測気象庁データを日本気象協会が送信(JWA→野中,山本,山川)
- 00:59JST 気象庁データを受信(野中,山本,山川)
- 01:20JST 姿勢ターゲット RAM 書換および確認(MPC 江西, IA 大塚, ISAS 山川, 山本)
- 01:30JST ゾンデ放球(感應寺,野中,三浦,大南)
- 02:00JST ゾンデ放球 (バックアップ) は実施せず
- 03:10JST ゾンデデータ取得停止(高度 21.1 km 程度)
- 03:17JST 放球データをCNE, TVC, LA 班へ送付(野中)
- 03:35JST CNE 班, TVC 班, 構造班が荷重計算, 制御解析を実施し, 結果を送信
- 03:37JST 観測風と予測風の比較(三浦)
- 04:00JST ゾンデ放球 (感應寺, 野中, 大南)
- 05:10JST ゾンデデータ取得停止(高度 15.7 km 程度)
- 05:15JST 放球データを CNE, TVC, LA 班へ送付(野中)
- 05:30JST 観測風と予測風の比較(三浦)
- 05:33JST CNE 班, TVC 班, 構造班が荷重計算, 制御解析を実施し, 結果を送信
- 06:51JST ゾンデ放球 (感應寺)
- 08:30JST ゾンデデータ取得終了(高度 21.9 km 程度)
- 09:03JST 放球データをCNE, TVC, LA 班へ送付(野中)

2.3. M-Vロケットの電波誘導システム

電波誘導 (RG: Radio Guidance)システムでは,精測レーダの観測量である直距離 (スラントレンジ),方位角 (ア ジマス),上下角 (エレベーション)から,M-Vロケットの軌道推定 (位置,速度)を行ない,飛翔中に生ずる軌 道分散を補正して最終達成軌道の目標軌道からの誤差極力小さくするための誘導コマンド (ロケットの姿勢ター ゲット変更)を地上から新精測レーダを介してロケットに送信する.図2.3-1は,精測レーダと電波誘導システム 間のレーダデータとコマンドのやりとりを示した図である.

M-Vロケットでは、あらかじめ姿勢制御目標は機上の計算機に格納されており、電波誘導用の地上計算機に は基準軌道情報が格納されている。M-Vロケットで使用している電波誘導は、基本的には、あらかじめ軌道計 画で作成した姿勢目標まわりに軌道運動を展開し、その変分量に基づいて誘導方策を決定する間接(implicit)誘 導方式がベースになっているが、衛星投入軌道および衛星の要求に応じて、各号機の各段の誘導方式を新たに開 発した。



図2.3-1 M-V電波誘導システム

2.3.1. 電波誘導システムのM-V-4号機からの変更点と対策

2000年10月にマシンのリプレースを実施し、システムの動作確認を実施している.2001年1月には新精測レー ダと組み合わせたバルーン試験、及びコリメによるコマンド試験を行っている.2002年2月のS-310-30号機の打 上げ、および2002年8月のS-310-31号機/32号機の打上げにおいては、運用を行い良好な結果を得ている.5号 機以降においては、小笠原局スレーブ機能の追加をしたが、2002年9月に、小笠原局とインターフェース試験を 実施した.さらに5号機以降の対応として簡易誘導アルゴリズム用誘導計算モニタを追加した.M-V-5号機は正 分ではなく、正秒での打上げになったが、フライトオペレーションにて電波誘導システムにおいて問題がないこ とも確認した.

2.3.2. M-Vロケット組立およびフライトオペレーション中のRG班作業

表2.3.2-1に電波誘導に関わる作業を整理する.また,表2.3.2-2には,M-V-8号機を例にとり,フライトオペレーション中のCOLA解析(衝突回避解析)の実績についてまとめる.COLA解析とは,M-Vロケットの第3段機体, 衛星,および,第3段から分離されるサブペイロードと軌道上物体との干渉について解析を実施し,干渉する恐 れがある時間帯に対してロンチウィンドウを修正するものである.干渉解析作業自体は, M-V プロジェクトから提供されたロケット・衛星の軌道情報に基づき, 統合追跡ネットワーク技術部が実施する.

表2.3.2-1 組立およびフライトオペレーション中の作業項目

組立オペレーション時の作業概要

- ・誘導ソフトウェア整備
- ・軌道パラメータ、表示パラメータ、誘導パラメータセット
- ・各種軌道データ作成
- ・誘導系I/F確認・軌道表示系I/F確認・誘導ソフト確認
- ・他系とのI/F確認(ロケテレI/F)
- ロケット搭載機器とのコマンド動作チェック

フライトオペレーション時の作業概要

- ・軌道パラメータ,表示パラメータ,誘導パラメータセット
- ・各種軌道データ作成
- ・誘導系I/F確認・軌道表示系I/F確認・誘導ソフト確認
- ・他系とのI/F確認(ロケテレI/F・アンテナ系I/F・増田スレーブI/F)
- ・ロケット搭載機器とのコマンド動作チェック

表2.3.2-2 M-V-8号機フライトオペレーション中のCOLA解析

統合追跡 NW 技術部からの提供時間 解析時間(06:20:06:40 JST, 5 秒ステップ)

2	月 01	日.	(水)	10:00	(2月16~28日打上げ)
2	月 07	7日	(火)	10:00	(2月16~28日打上げ)
2	月 10)日	(金)	10:00	(2月16~28日打上げ,最終審査会用)
2	月 15	日	(水)	20:00	(2月20~28日打上げ)
2	月 18	3日	(土)	22:00	(2月20~22日打上げ)
2	月 20)日	(月)	11:00	(2月21~22日打上げ)
2	月 21	日.	(火)	11:00	(2月22日打上げ)
*	統合	追助	ネッ	トワーク	技術部(森氏,堀井氏,廣瀬氏)に依頼.

2.3.3. M-V-4 号機軌道推定アルゴリズムとM-V-5 号機以降における対策

2.3.3.1. M-V-4 号機における軌道推定の問題点

M-V-4号機ノミナル軌道は、近地点高度270km、遠地点高度560km、軌道傾斜角31degであった. そのために、 第3段燃焼終了付近において、遠地点高度と近地点高度の逆転という事象が発生する. この遠近地点逆転後(第 3段燃焼終了後)の軌道の静定先がINGデータと厳密には合致せず、電波誘導システムで推定した遠地点高度の 立ち上がりが遅いという問題があった. M-V-4号機においては、軌道推定処理における平滑化は100msecごとの レーダデータ(レンジ、アジマス、エレベーション)20点から等加速度運動を想定した最小2乗法により1秒毎 の代表値およびその時間微分値を算出していた. また、1秒ごとの代表値に対して屈折補正をかけていた. 等速 運動を想定した更新式によるリアルタイムのカルマンフィルタを用いており、フィルタの観測値には、レンジ、 アジマス、エレベーションとその微分値(平滑化出力)であった.

2.3.3.2. 検討の経緯とM-V-5号機における対策

M-V-5号機では屈折補正を100msecごとにかけた上で平滑化を行い,屈折補正は収束計算(計算回数リミット: 15回)にて行う.従来は1回の計算のみであった.また,カルマンフィルタのフィルタパラメータ更新時に共分 散値のリセットを行う.M-V-4号機までは,平滑化(最小2乗法)の過程で計算されるフィルタ計算用の共分散 値にリミッタがかけられていたために共分散値が下限で一定となっている時間帯があったが,M-V-5号機以降に おいて平滑化およびフィルタ処理におけるリミッタ処理の変更はしない.平滑化の過程では,多くのデータが棄 却され過ぎないように分散値の下限は設けている.シミュレーションの結果,データの桁数を増加させることで 振動が収まる.また,エレベーション微分値精度が特に寄与することがわかった.表2.3.3-1に軌道推定手法の経 緯をまとめる.

号機	M-V-1, 3, 4号機	M·V·5, 6, 8, 7号機
平滑	100m秒毎20点のデータを用い2次式にフ	100m秒毎のデータに屈折補正を行い、その値
	ィッティングし、中間点を計算し、その値	を用いて,2次式にフィッティングし,中間値
	に屈折補正をかけ、代表値として計算.	を代表値として計算.
屈折補正	観測値から、補正式を用いて、屈折補正誤	観測値から、補正式を用いて、屈折補正誤差を
	差を計算し、観測値からその誤差を引くこ	計算し、観測値からその誤差を引くことにより
	とにより補正する(真値を求める).	擬似真値を求める.
		擬似真値から、補正式を用いて、屈折補正誤差
		を計算し、擬似真値に加算することにより擬似
		観測値を求める.
		この擬似観測値が観測値と等しくなるように、
		収束計算(最大15回)で真値を求める.
フィルタ	M-3SⅡ型の方法を用い、従来計算してい	フィルタパラメータの変更時、共分散行列のリ
	た係数をKsとして簡易化し、パラメータと	セットを行う.ただし、一時的に、ピークがた
	して与えることとし, また, システムのノ	たないように,計算を2回行う.
	イズを代表し、ノイズとしてパラメータと	
	して設定.	

表2.3.3-1 軌道推定手法の経緯

2.3.4. 第1段電波誘導(M-V-5, 6, 8, 7号機で同一内容)

第1段燃焼中に、第1段の飛翔軌道を修正するための電波誘導コマンドは送信しない.

2.3.5. 第2段電波誘導(M-V-5, 6, 8, 7号機で同一内容)

第2段電波誘導は、地上での第1段軌道推定結果に基づく第2段の姿勢ターゲット誘導操作量をロケットに送 信することで行われる.第2段燃焼終了後の頂点における速度、高度、方位角で構成される評価関数が最小とな るように、ある秒時(第2段誘導誘導指令のコマンドが有効になる時刻)以降の姿勢ピッチ/ヨープログラムに一 定バイアスを加える(バイアス的なターゲット変更論理).実際には姿勢ターゲット誘導操作量に対する終端条 件(@B2頂点)の感度テーブルを1秒毎にあらかじめ作成しておき、それによって姿勢ターゲット操作量を計算 する.また、第2段点火時刻はX+75秒に固定されている.

第2段誘導は、第1段燃焼中の50~70秒に計算され、71秒においてコマンド送信される。2秒後の73秒付近

でロケット側で受信開始,75秒の第2段燃焼開始までに約2度のコマンドを受信可能である。第2段点火以降も 145秒まではロケット側は受信可能であるために2度以上のコマンドも送信可能である(1度のコマンドに約1秒 間). 複合コマンドの場合 (ピッチ/ヨー)ではその分2倍かかることになる.

第2段におけるコマンド受信後に実際に姿勢ターゲット変更を有効にする時刻(105秒)は、姿勢ターゲット修 正時の瞬時外乱(姿勢制御能力)、姿勢ターゲット誘導操作量(第3段姿勢へのレファレンスチェンジに要する 時間との関連)、コマンドの時間安定性(第1段燃焼中50~70秒の間のコマンド計算値の変化)の観点から設定 される。

第2段の第2回目のコマンド送信(113秒)は、1回目にリミッタで送り切れなかった分を送信するためにあり、 1回目のコマンドが有効になる時間105秒と比較して、8秒遅く、コマンド量の感度としては約1.3倍となっている。 この2回目のコマンドでは、ロケット側受信は実質的には115秒付近となる、2回目のコマンド受信時には既に 受信側ではコマンドは有効になっている時間帯なので、1回目のコマンドと異なり、受信と同時に有効となる。

2.3.6. 第3段·第4段電波誘導

M-V-5号機・第3段誘導

第3段電波誘導では、第3段燃焼終了後の第4段セントロイド時の速度ベクトル誤差を最小とするように、 第3段の姿勢(ピッチ/ヨー)を制御する.なお、ピッチ、ヨーそれぞれノミナル姿勢に対して一定のバイア スを加え、第3段点火時刻は固定である.ここで述べている第3段燃焼終了後の第4段セントロイド時の速 度ベクトル誤差最小とする誘導則の他に、第4段燃焼終了後の脱出漸近線方向誤差を最小とする誘導則の案 があったが、a)誘導性能に関しては同等であり、b)前者が第3段までの軌道のみに依存し探査機軌道の影響 を受けないことから前者を想定する.

M-V-5号機・第4段誘導

第4段電波誘導では、第4段燃焼終了後の脱出漸近線(C3、赤緯 δ 、赤経a)誤差を最小とするように、第 4段の姿勢(ピッチ/ヨー)および点火時刻(タイム)を制御する。点火時刻コマンドがリミッタにかかった 場合には、方向(赤緯、赤経)のみを制御する。脱出時C3(無限遠速度の2乗)および脱出方向(赤緯、赤経) と、第4段点火時刻、ピッチ、ヨーの間の感度を直接利用する。この感度を利用して以下の方策によりコマ ンドを計算する。1)第3段燃焼終了付近の推定されたロケットの慣性座標をケプラリアンに変換、2)第4段 燃焼中間時間(第4段IG 374sec + 55.7sec = 430sec)のケプラリアンを2体問題を仮定して計算、3)慣性座標 系に変換、4)速度成分に第4段の Δ Vを加算、5)脱出漸近線(C3、赤緯 δ 、赤経a)を計算、6)ノミナル値 との差より、感度行列を用いてコマンド量を計算する。

M-V-6号機・第3段誘導

第3段点火時刻が固定されている M-V ロケットでは、投入軌道の近地点を200km 以上にすると、第3段 燃焼区間が第2段燃焼終了後の遠地点の手前に来る。そのため、発射角をむやみに上げても、近地点高度を 280km 以上に上げることはできない。M-V-6号機では、投入能力の観点からマージンがあるために、そのマー ジンを1~2段軌道部分ではなく、第3段の姿勢を面外に数度傾けることで、逃がすことにする。同時に、 第3段の軌道面外マージンを、第2段までの軌道分散を吸収する際に有効に利用する。

具体的には、第3段のピッチ/ヨーコマンドにより、遠地点/近地点高度を制御するために、第3段のヨー 方向を9度程度面外方向に振る(第3段ノミナルヨー角=99度[南側]).第3段燃焼終了後に近地点が来ない ように3段燃焼終了時の飛行経路角は+0.5度とする.また、第3段点火時刻は固定されている.第2段燃焼 終了後の軌道推定結果から、テーブル方式により、第3段のバイアス的なピッチ/ヨーコマンドを計算する. 誘導テーブルは、第2段燃焼終了後の遠地点の高度分散と速度分散の2次元テーブルであり、その分散とし ては、第2段のバイアス的なピッチ誤差0度、±3度および±6度の5×5ケースを想定する. 誘導テーブル を補間することで、ピッチ/ヨーコマンドを計算し、さらに、第2段までの軌道面外の分散に対応するため に、速度方向方位角のノミナル値との差を加算して最終的なコマンドとする. 第3段レファレンスチェンジ に要する時間を考慮して、ノミナルヨー角99度を基準として、ヨーコマンドのリミッタとしては±10度と する(ノミナルヨー角とコマンドリミッタについては、モンテカルロシミュレーションの結果を反映させる). また、誘導テーブル範囲外の領域の誤差が生じたときには、補外によりコマンド量を計算する. これにより、 M-V-4号機の事故ケースが生じた場合も衛星を軌道投入できることを確認している. なお、衛星分離姿勢を 制御するための第4段電波誘導は行わない(リミッタを0度と設定することで対処). エネルギー過多の場合、 遠地点高度600kmを評定とする(コマンドテーブルにおける近地点しきい値は220km).

M-V-8号機・第3段誘導

第2段燃焼終了後の軌道推定結果から、テーブル方式により、第3段のバイアス的なピッチ/ヨーコマンドを計算する.より詳細には、第2段燃焼終了時の頂点速度(VAPG)と頂点速度アジマス(VAPAZ)の2つのパラメータで構成される誘導テーブルを内挿することで計算される第3段のピッチ/ヨーコマンドにより、 遠地点高度・軌道傾斜角を制御する.また、第3段点火時刻は固定されている.

M-V-7号機・第3段誘導

第2段燃焼終了後の軌道推定結果から、テーブル方式により、第3段のバイアス的なピッチ/ヨーコマンドを計算する.より詳細には、第2段燃焼終了時の頂点速度(VAPG)と頂点速度アジマス(VAPAZ)の2つのパラメータで構成される誘導テーブルを内挿することで計算される第3段のピッチ/ヨーコマンドにより、 遠地点高度・軌道傾斜角を制御する.また、第3段点火時刻は固定されている. 2.3.7. 電波誘導コマンドシーケンス

	リミット(RG 地	上側ソフトウェアリミット)	ステップ
2段1回目	±5度	2段ピッチ/ヨー	0.1 度/30~50msec
2段2回目	±10度	2段ピッチ/ヨー	0.1 度/30~50msec
3段	±5度	3段ピッチ/ヨー	0.1 度/30 \sim 50msec
4段	±5度	4段ピッチ/ヨー	0.1 度/30 \sim 50msec
	$-20\sim +40$ 秒	4段点火時刻	1.0 秒/30~50msec
	(タイマのハ	ヽードウェアリミットは−30~	~+40秒)

表2.3.7-1 M-V-5号機電波誘導コマンド

表2.3.7-2 M-V-5号機電波誘導関連シーケンス

機体側		地上側	
2 段 RG コマンド受信	63~125 秒	2段 RG コマンド計算	50~70 秒
2 段 RG コマンド有効	105~151 秒*	2 段 RG コマンド送信(第 1 回)	71秒
		2 段 RG コマンド送信(第 2 回)	113秒
3段RG コマンド受信	151*~192秒	3段RG コマンド計算	140~160秒
3段 RG コマンド有効	151*~312秒	3段RG コマンド送信	165 秒
4段 RG コマンド有効	312 秒以降	4段RG コマンド計算	300~320秒
4段RG コマンド受信	313~335秒	4段RG コマンド送信	325 秒

表2.3.7-3 M-V-6号機電波誘導コマンド

USWL	(RC 地上側)ソフ	トウェアリミット	、) ステップ

	<u></u>	<u>上側ノノトワエノリミツト/</u>	<u> </u>
2段1回目	±5度	2段ピッチ/ヨー	0.1 度/30~50msec
2段2回目	土10度	2段ピッチ/ヨー	0.1 度/30~50msec
3段	±5度	3段ピッチ	0.1 度/30~50msec
3段	±9度	3段ヨー	0.1 度/30~50msec
4段	±0度	4段ピッチ/ヨー	0.5 度/30~50msec

表2.3.7-4 M-V-6号機電波誘導関連シーケンス

機体側		地上側	
2段RG コマンド受信	63~125 秒	2段RG コマンド計算	50~70秒
2 段 RG コマンド有効	105~151 秒	2 段 RG コマンド送信(第 1 回)	71秒
		2段 RG コマンド送信(第 2 回)	113秒
3段RGコマンド受信	151~192秒	3段RGコマンド計算	140~160秒
3段 RG コマンド有効	151~312 秒	3段 RG コマンド送信	165 秒
4段 RG コマンド有効	312 秒以降	4段 RG コマンド計算	300~320秒
4段 RG コマンド受信	313~335 秒	4 段 RG コマンド送信	325 秒

表2.3.7-5 M-V-8号機電波誘導コマンド

	リミット(RG 地	上側ソフトウェアリミット)	ステップ
2段1回目	±5度	2段ピッチ/ヨー	0.1 度/30~50msec
2段2回目	±10度	2段ピッチ/ヨー	0.1 度/30~50msec
3段	±5度	3段ピッチ	0.1 度/30~50msec
3段	土10度	3段ヨー	0.1 度/30~50msec

表2.3.7-6 M-V-8号機電波誘導関連シーケンス

機体側		地上側	
2段RG コマンド受信	63~125秒	2段RG コマンド計算	50~70秒
2段 RG コマンド有効	105~151 秒	2段RG コマンド送信(第1回)	71 秒
		2段RG コマンド送信(第2回)	113秒
3段RG コマンド受信	151~192秒	3段RG コマンド計算	140~160秒
<u>3段RG コマンド有効</u>	151~312秒	3段RG コマンド送信	165 秒

表2.3.7-7 M-V-7号機電波誘導コマンド

リミット(RG 地上側ソフトウェアリミット) ステップ

		上風// / ニ / ス / \ / /	
2段1回目	±5度	2段ピッチ/ヨー	0.1 度/30~50msec
2段2回目	土10度	2段ピッチ/ヨー	0.1 度/30~50msec
3段	±5度	3段ピッチ	0.1 度/30~50msec
3段	±10度	3段ヨー	0.1 度/30~50msec

表2.3.7-8 M-V-7号機電波誘導関連シーケンス

機体側		地上側	
2 段 RG コマンド受信	63~125 秒	2 段 RG コマンド計算	50~70秒
2 段 RG コマンド有効	105~151秒	2 段 RG コマンド送信(第 1 回)	71秒
		2 段 RG コマンド送信(第 2 回)	113 秒
3段RG コマンド受信	151~192秒	3段 RG コマンド計算	140~160秒
<u>3段RG コマンド有効</u>	151~316秒	3 段 RG コマンド送信	165秒

522

2.3.8. M-V-5号機飛翔結果

発射日時 2003年5月9日 13時29分25秒 (JST)

ランチャ角 AZ = 90.2度, EL = 80.8度

飛翔軌道

- ・ レーダデータに基づく軌道推定は予定通り行われ、衛星を所定の軌道に投入した.
- ・ 以下にフライト時の投入軌道要素を示す.

· 孜∠.J.O-I IVI-V-J 与 悈 仅 八 判 坦 安 者	表2.3.8-1	M-V-5号機投入軌道要素
------------------------------------	----------	---------------

Epoch	X+448秒 (=3	74 秒+コマンド-20 秒+燃焼 94 秒)		
ケプラリフ	マン(Kepleriar	ı)		
а	-36702.22	km (半長径, semi-major axis)		
e	1.179440	(離心率, eccentricity)		
i	31.0820	deg(軌道傾斜角, inclination)		
Ω^*	40.3396	deg (昇交点経度, asc.node, * 打上げ時グリニッジ基準)		
ω	101.9460	deg(近地点引き数,argument of perigee)		
\mathbf{M}	0.3758	deg(平均近点離角, Mean Anomaly)		
瞬時分点での地球赤道面基準の接触軌道要素				

脱出軌道の漸近線(asymptote of escape hyperbola)

C3	10.8604	km ² /s ² (脱出軌道の無限遠での相対速度の2乗)
δ	-29.0060	deg(脱出軌道の漸近線方向の緯度, declination)
α	221.1665	deg(脱出軌道の漸近線方向の経度, right ascension)
<u>п</u> –	カル座標系(local	coordinate)
r	6614.679	km (地心距離,radial distance)
Φ	29.1750	deg(地心緯度,geocentric latitude)
Δ	150.6213	deg (経度, longitude)
v	11.462127	km/s (速度, velocity)
θ	3.9386	deg (経路角, flight path angle)
в	101.2259	deg (方位角, azimuth)

誘導コマンド

・ 誘導コマンドは所定の秒時に算出され、コマンドコンバータを介して送信された.
 第2段誘導コマンド:ピッチ+0.1°、ヨー 0.0°
 第3段誘導コマンド:ピッチ-0.1°、ヨー-0.1°
 第4段誘導コマンド:ピッチ-0.3°、ヨー+0.1°、タイム-20秒

2.3.9. M-V-6 号機飛翔結果

発射日時 2005年7月10日(日曜日)X=12時30分(JST)

ランチャ角 AZ = 87.6 度, EL = 80.2 度

飛翔軌道

・ レーダデータに基づく軌道推定は予定通り行われ、衛星を所定の軌道に投入した.

近地点高度:245 km, 遠地点高度:585 km, 軌道傾斜角:31.3°

誘導コマンド

・誘導コマンドは所定の秒時に算出され、コマンドコンバータを介して送信された。
 第2段誘導コマンド:ピッチ-0.1°、ヨー-0.2°

第3段誘導コマンド:ピッチ+0.8°, ヨー-5.2°

小笠原局

- ・ 精測レーダデータよりリアルタイムスレーブにより追跡良好
- クリスマス局
 - ・ X+400秒の軌道6要素を電話で連絡、手入力により予報値データ作成、入感後オート追跡良好

2.3.10. M-V-8号機飛翔結果

発射日時	2006年2月22日	X = 06 時28分((JST)

ランチャ角 AZ = 143.0度, EL = 81.5度

飛翔軌道

- レーダデータに基づく軌道推定は予定通り行われ、衛星を所定の軌道に投入した。
 近地点高度:304 km、遠地点高度:733 km、軌道傾斜角:98.2°
- 誘導コマンド
 - ・ 誘導コマンドは所定の秒時に算出され、コマンドコンバータを介して送信された.
 第2段誘導コマンド:ピッチ-0.1°,ヨー-0.1°
 - 第3段誘導コマンド:ピッチ-0.5°, ヨー-0.3°
- 増田局スレーブ
 - ・ 増田局に対して、リアルタイムで専用回線を通して、軌道要素を送信した.

2.3.11. M-V-7号機飛翔結果

発射日時 2006年9月23日 X = 06時36分 (JST)

ランチャ角 AZ = 149.3 度, EL = 82.0 度

飛翔軌道

・ レーダデータに基づく軌道推定は予定通り行われ、衛星を所定の軌道に投入した.

近地点高度:280 km, 遠地点高度:686 km, 軌道傾斜角:98.3°

誘導コマンド

・ 誘導コマンドは所定の秒時に算出され、コマンドコンバータを介して送信された。
 第2段誘導コマンド:ピッチ+0.4°、ヨー-0.1°
 第3段誘導コマンド:ピッチ+0.2°、ヨー 0.0°

増田局スレーブ

· 増田局に対して、リアルタイムで専用回線を通して、軌道要素を送信した.

3. 成果の概要

3.1. 軌道計画

各衛星の要求に応じて,投入軌道を設計し,その投入条件およびロケット固有の制約(ゼロリフト等)を満足 するロケットの上昇軌道を計画することができた.

3.2. 風補正

ゾンデによる風データの蓄積,数値風予報データの送受信,姿勢ターゲット最適化計算,制御系・構造系との 姿勢ターゲットインターフェース等の風補正のオペレーションは,すべての号機で正常に機能した.

3.3. 電波誘導

各ロケット号機の基準軌道に合わせて、電波誘導システムのアルゴリズム開発、およびそのパラメータ等の設 計最適化を行い、かつ、飛翔時はすべての号機で電波誘導が正常に機能した。

4. 次期固体ロケットへの反映事項

- 人工衛星・探査機のミッション成果を最大化するために、複雑な要求に臨機応変に対応できる軌道計画上の 柔軟性を持たせることが望ましい。
- ・ 風計測システムが、準リアルタイム性を持つと運用負荷が軽減される.
- ロケット構造系・制御系が、できるだけ風誤差・変動に対応できることが望ましい。
- ・ 固体ロケットの誘導アルゴリズムは改良した上で次期固体ロケットにも適用可能である.

5. まとめ

M-Vロケット(5号機,6号機,8号機,7号機)における軌道計画,風補正,および電波誘導システムの研究 開発および成果についてまとめた.すべての号機でロケットおよび搭載された衛星・探査機の飛翔は正常であり, これは,飛翔軌道の設計,風予測に基づく姿勢ターゲットの最適化,精測レーダデータに基づく軌道推定および 誘導論理の構築の妥当性を示すものである.

参考文献

- [1] 山川宏,石井信明,川口淳一郎,前田行雄,感応寺治城,迫田幸恵,古林剛士,渋谷彰,"M-Vロケットの飛 翔軌道/風補正/電波誘導 (M-V Rocket: Trajectory/Wind Compensation/Radio Guidance System)",宇宙科 学研究所報告,特集第47号,「M-Vロケット(1号機から4号機まで)」,2003年3月, pp. 271-329.
- [2] H. Yamakawa, "M-V Rocket: Pitch Angle Program Modification due to Wind Shear in M-V Rocket First Stage Ascent Trajectory," Proceedings of the 4th Workshop on Astrodynamics and Flight Mechanics, Aug. 29-30, 1994, ISAS, pp. 180-184.
- [3] 山川宏,川口淳一郎,松尾弘毅,"M-Vロケット第一段上昇軌道における姿勢プログラム変更の可能性(The Possibility of Pitch Angle Program Modification due to Wind Shear in M-V Rocket First Stage Ascent Trajectory),"第11回誘導制御シンポジウム, Oct. 27-28, 1994,東京, pp. 149-154.
- [4] H. Yamakawa, "M-V Rocket: Pitch Angle Program Modification due to Wind Shear-II," Proceedings of the 5th Workshop on Astrodynamics and Flight Mechanics, Aug. 24-25, 1995, ISAS, Japan, pp. 188-193.
- [5] N. Ishii and H. Yamakawa, "Pitch Angle Modification due to Wind Shear in M-V Rocket First Stage Ascent Trajectory (part III: Actual Wind Forecast and Flight Results), "Proceedings of the 7th Workshop on Astrodynamics and Flight Mechanics, ISAS, July. 28-29, 1997, pp. 183-188.
- [6] H. Yamakawa and N. Ishii, "High Altitude Wind Forecast and M-V Rocket Pitch/Yaw Program Modification," Proceedings of the 8th Workshop on Astrodynamics and Flight Mechanics, ISAS, July. 23-24, 1998, pp. 207-212.
- [7] H. Yamakawa, Y. Maeda, N. Ishii, J. Kawaguchi, Y. Sakoda and T. Furubayashi, "M-V-#3 (PLANET-B) Upper Stage Radio Guidance Algorithm," Proceedings of the 8th Workshop on Astrodynamics and Flight Mechanics, ISAS, July. 23-24, 1998, pp. 172-177.
- [8] Y. Sakoda, T. Furubayashi, A. Shibuya, H. Yamakawa, N. Ishii and Y. Maeda, "Problems in the Orbit Determination Process of the M-V Launch Vehicle Radio Guidance System," Proceedings of the 11th Workshop on Astrodynamics and Flight Mechanics, ISAS, July 18-19, 2001, pp. 222-227.
- [9] H. Yamakawa, S. Nonaka, H. Ogawa, "High Altitude Wind Forecast and Pre-Launch Pitch/Yaw Program Modification for the M-V-#5/HAYABUSA Launch Vehicle," ISTS Paper 2004-g-18, 24th International Symposium on Space Technology and Science, Miyazaki, Japan, May 30-June 6, 2004.